

外国人材を積極雇用

「知らない」=「怖い」 をなくしていきたい

瀧建設興業株式会社
代表取締役社長

たき ゆういち
瀧 雄一 さん



自ら積極的に海外に渡航しプレゼンを行い、現在11か国35人、来年度には14か国57人の外国人スタッフを雇用予定。市内の学校で職業体験会や異文化交流を行う「キャリア学習」や、少年院などにおける更生保護活動など、地域貢献にも力を入れている。

みなさんの活躍
紹介します

窓の 心

——多国籍の人材を採用することで共通言語が日本語になり、上達が早くなる。これは社長のアイディアでしょうか。

最初からそうだったわけではなく、従業員の大規模な失踪が起こるリスクへの備えと、技能実習生のニーズがどこの国から出ても我々は経験者でいられる、というのが多国籍化の理由でした。何年か経って、会社でバーベキューや忘年会をしているうちに、全員が日本語で話していることに気づいたんです。現場に入るチームを全て違う国籍で構成することもしてきました。そうすることで日本語での会話が增え、上達が早まったというのはあると思います。

——会社としてもいろいろな言語に対応できますね。

彼らにとつて、話せる言語が複数あるのは当たり前なんです。インドの子がネパール語を

話したり、ラオスの子がタイ語を話したり、異なる国でも言語を共有できるのは強みです。来年1月にタイから3人が入る予定ですが、通常は通訳が必要のところ、うちにはラオスの子がいるから通訳が不要なんです。

——高い外国人定着率をどう維持しているのでしょうか。

外国人主体で地域のコミュニティと関わっているのが大きいと思います。先日、千歳高校で行った「キャリア学習」では、各国の料理を生徒に振る舞ったり、グループワークをやったり、最後に国旗を掲げてみんなで記念撮影。これらを1日かけてやりました。働くだけでなく、こういうイベントに参加し、自国を紹介できるのは嬉しいとみんな言っています。

——市内では今後、外国人の増加が予想されます。

市民と外国人を少しでもつなげようと、国際理解のつどいというイベントを定期的に開催しています。国籍を超えて交流できる仕掛けをしてあるので、「外国人はこういう人なんだ」との気づきがたくさんあります。一人ひとりに話を聞くと、みんな夢を持って来日しているのです。彼らに日本に来てよかった、このまちでよかったと思ってもらいたいんです。この取り組みを加速させ、外国人を「知らない」「怖い」という感覚をなくしていきたいと思っています。

第27回

今回は、「白内障の手術を受ける時期」についてお話しします。

白内障は、目の中のレンズの役割をする水晶体が濁ってしまう病気です。おもに加齢とともに発生し、80歳を過ぎるとほとんどの方に白内障がみられます。かすんで見える、まぶしいなどの症状がでて、進行すると視力が低下します。

白内障の治療は、手術しか方法がないので、見え方が悪くなり、日常生活が不便になったら手術を行います。

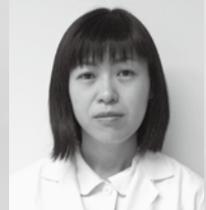
どのくらい進行したら手術をするのかは、その人のライフスタイルによって変わります。車を運転する人や細かいものを見る必要がある人は、視力がよくても「かすみ」や「まぶしさ」が強ければ手術をすることがあります。

先生、教えて!



市立千歳市民病院 地域医療連携課
☎(24)3000 内線 8138

白内障の手術を受ける時期



市立千歳市民病院
眼科診療科長 田下 亜佐子

困っています。また、日常生活で、視力が悪くなってきたから手術をすることもありません。

手術では、濁ってしまった水晶体のかわりに、人工の眼内レンズを挿入しますが、白内障になる前の見え方に戻るわけではありません。手術を行うと眼鏡が必要になることも多いので、早めに予防的な手術をすることは勧められません。

手術の時期が早くても遅くても、手術後の見え方には影響はありませんので、自分の必要な時期に手術をすることが大事です。ただし、白内障を放置すると、失明近くなるまで進行することがあります。そうなるのと手術が難しくなり、一般的な方法での手術ができなかったり、合併症が起きたりやすくなったりします。適切な時期に手術を考えた方がよいでしょう。